

会員投稿

私とスポーツ(1)

太田市 太田 又次

◎まえがき

私とスポーツ、古希を迎えた今、過ぎ去った70年を振り返ってみる時、私の歩んできた歴史はまさにスポーツ人生そのものであったとすることができる。

この間、三菱電機(株)在職のサラリーマン生活が42年強の長きにわたるが、スポーツの歴史はさらに長く60年以上はあるであろう。そしてこの後まだまだいつまで続くかわからない。

そこでなぜこのような長年月飽きもせずスポーツに親しみやってきたのか、私とスポーツとのかかわり合い、経験、幾多の記録などについてまとめてみた。

(なお、経験した種目については別紙「スポーツの経歴」にまとめてあり、個々の種目の内容は後述する)

◎私をスポーツマンに育ててくれた環境(1)

「門前の小僧、習わぬ経を読む」ということわざがある。人はその置かれた環境により自然に物事を覚え育つということであろう。特に子供時代においては…。

私の生まれ育った所は別項にも記述してあるように、山あり、川あり、池あり、田(たんぼ)、堀(小川)、砂川原ありと自然に囲まれた田舎の山村であった。

当時はテレビどころかラジオもない時代、子供の遊びといえば必然的に屋外の自然を相手とした遊びとなる。また現在のように勉強、勉強と、勉強に追いかけることもなかった。学校から家に帰っても家族は殆どいないから、カバン(われわれはドランと言っていた)を家の中に放り込んで外に飛んで出てしまう。もちろん遊ぶことは学校で仲間と相談して集まる場所も決めてある。遊び方は全く多岐にわたり、季節によっていろいろと異なる。遊び方の種類や詳細については別紙「子供の頃の遊び」を参照。特に多かった遊びとして記憶にあるのは砂川原でのとびっこ(運動会・陸上競技)、戦争ごっこにちゃんばらごっこ(ごっこは方言)、魚釣り(川、池、堀)、魚取り(特殊な網によるすくい取り、水を干して取るかいどり)などである。

砂川原や丘、山、竹やぶの中を登ったり走ったり、時には木登り、水の中やどろんこの中に入っての魚取り。とにかくこんな遊びが毎日、毎日続くのであるから自然と足、腰、腕が鍛えられて強くなり、バネがつくわけである。すなわち毎日がトレーニングであり基礎体力作りである。後に私がいろいろなスポーツをこなし、ある程度の成績を収め、70歳の今なおテニスを1日数時間続けられ、100mも14秒ほどで走ることもできるのも、元をたぐれば、じつに子供のころの自然を相手とした遊びから得た基礎体力と、休むことなく今日までスポーツを続けてきた結果であろうと思っている。(つづく)



昭和13年3月。入社受験用に写す

会員投稿

私とスポーツ(2)

太田市 太田 又次

◎私をスポーツマンに育ててくれた環境(2)

私の生まれ育った所、静岡県磐田郡(現在の天童市)はその頃、陸上王国といわれ陸上競技の盛んなまたレベルそのものも高い地域であった。それにはそれなりの理由があった。

当時は、村に住んでいた独身の青年たち(田舎では若い衆と呼んでいた)により組織された青年団があり、いろいろな面において活発な活動を行っていた。殊に陸上競技は村内大会(光明村)が毎年秋の始めに字別(四つの大字)の青年団対抗運動会として開かれていた。

この大会には、年寄りを除いた村の大半の人たちがそれぞれの字の応援団として集まり華々しい応援合戦がくり広げられお祭り騒ぎとなる。

さて、この大会が近づく頃(8月下旬?)青年団の練習会が始まる。練習は小学校の一周200mのグラウンドである。時間は夜の7時から9時頃まで。我われ子供たちはこの練習の始まるのを楽しみに待ちかねていたので、練習会が始まると夕飯もそこそこ勉強などほったらかしにして仲間と連れだって学校へと出かける。

グラウンドには各所に裸電球が青竹に吊り下げられ夜間照明となっているが、50m先は薄暗くてはっきりと見えない

ような状態であった。

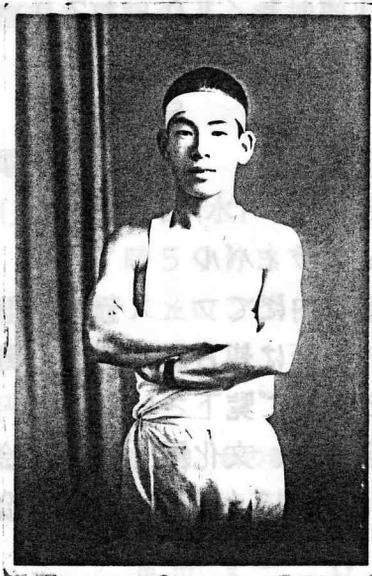
練習はトラックとフィールドに分かれて随時行われるが、こちらはひとつ毎に興味があるため、あちこちと走り回って見に行く。100mのスタート、走高跳、走幅跳、棒高跳は特に私の好きな種目で、目を皿のようにして見、そしてあのスパイクの音にわくわくするとともに「いつかスパイクを履いて走ってみたいなあ」とあこがれたものである。

なお、村内青年団大会の各種目のトップ選手は、その後開催される七ヶ町村による地方支部大会に村代表として出場し、さらに支部大会の上位者は郡大会、県大会へと駒を進めることのできる仕組みとなっている。

一方、前記青年団大会と同様に小学校の方でも、村大会、地方支部大会、郡大会と一連の大会が開かれ、

おかげで私も後に郡大会まで出場の経験を持つことができた。

このように一般(青年団)と学校それぞれに系統づけられた活動組織を持ち、スポーツ、陸上競技に親しみやすい動機づけと環境のあったことが、私をスポーツマンに育ててくれた一因であると思っている。(つづく)



昭和17年11月・愛知選手権にて
(800mリレー2位、100m3位)

会員投稿

私とスポーツ(3)

太田市 太田 又次

◎私をスポーツマンに育ててくれた環境(3)

学校を卒業した時の私の経験したスポーツは、陸上競技、水泳、野球(ベースボール)、卓球(ピンポン)、バレーボール、ドッジボールなどであった。特に陸上競技は良い先生より基礎からしっかり指導を受けたが、他はお遊びのスポーツであった。

しかし、これらのスポーツをやっていたことが、後々大いに役立つことになったのであるから、何でもできる時、またチャンスがあったらやっておくべきであるということの貴重な体験をした。

昭和13年(1938年)春、尋常高等小学校を卒業(現在の中学校2年生にあたる)と同時に三菱電機(株)名古屋製作所に見習生として入社した。

私の本当のスポーツとのかかわり合いは、この三菱電機に入社、就職したことに始まったと言えよう。

入社後1年間は遊ぶ暇も無く過ぎ、2年目すなわち見習生2年となつてのこと、社内の職場対抗野球大会が開かれるということを知り、かつて学生時代に野球経験のある1・2年生を集めてクラブを結成、名付けて双葉クラブ。猛練習を重ねて大会に参加、次々と一般の人たちを倒しての大活躍に一躍有名クラブとなり、私もまた有名(迷?)人となった。これが入社後最初のスポーツとの出会いであった。

当時は、所内にはまだ正式な運動クラブとしての組織も無く、愛好者によるグループ、テニス(硬式・軟式)、サッカー、陸上競技、バレーボール(9人制)、野球部等がそれぞれ細々と活動している程度であった。また所内大会も野球とバレーボールくらいのものであった。

実際に三菱電機名古屋製作所を看板とした運動部が設けられ、対外的にも活動できるようになったのは太平洋戦争後、すなわち昭和20年(1945年)所内に労働組合が誕生し、労組活動の一環として運動部が新設されたものが、後に会社の福利厚生部門に移されてからのことであった。

以後各種の運動部が次々と生まれ活発な活動が展開されていった。所内大会もまた春秋の2回工場対抗(課対抗)として開催されるようになり、多くの人たちの参加できる場が開け、社員の団結、士気高揚にも大いに役立ったように思われる。

このような所内大会の開催により、各職場とも選手の駆り集めが大変となり、少しでもできたり、経験がある者は引っ張り出された。おかげで私も大もてとなりいろいろな競技に駆り出され、腕の方もそれなりに上達することができた。野球、卓球、バレーボール、テニス(硬式・軟式)、サッカー、バドミントン、陸上競技、バスケットボール、水泳等ほとんどに顔を出し、特に正式部員として腕を磨いたのは陸上とテニス、バレーボールであった。

以上のように所内にしっかりとしたスポーツクラブの組織があり、誰でも楽しみ、経験をすることのできる機会、場があったこと、これが私をスポーツマンに育ててくれた第三の要因であろう。(つづく)

会員投稿

私とスポーツ (4)

太田市 太田 又次

◎私をスポーツマンに育ててくれた環境(4)

私をスポーツマンに育ててくれた環境の今ひとつ、それは良い指導者(コーチ)、良い競争相手(ライバル)となった仲間に恵まれ、めぐり会うことのできたことであろう。

小学校当時は陸上に堪能であり熱心であった鈴木邦夫先生、走高跳を一から仕込んでくれた初めての師である。そして高等小学校の2年間は静岡県内でも短距離に活躍し有名であった鈴木秀夫先生(100mを11秒位で走った)、この先生には陸上競技の走法の基本を徹底的に叩きこまれた。と同時に私に100mハードルを覚えさせてくれた第二の師である。

この両先生の指導のおかげで、三菱電機に入社後陸上部に席をおき、愛知県の実業団界において、短距離に、跳躍競技に1、2位の地位を確保できるまでに至ることができたものと思っている。

またバレーボール(9人制)では、同年配で愛知県では名門の旭ヶ丘高校時代バレーボールのハーフセンター(オールセンターとも言う)を経験した林 孝一君に手ほどきを受け、後に所内ではオールセンターとして名が通るようになった。

昭和23年(1948年)、サッカー大会にて右下脚骨折後、先輩の井筒敏夫氏の誘いに乗りテニス(硬式・昭和26年)に転向、ここでは上司でありテニスの大先輩でもあった菅原勝助さん、同年配で全日本大学テニス選手権(インカレ)に優勝の経験を持つ高橋重彦君等々の先輩に数々の指導を受け、いわゆるテニス狂になるまでになってしまった。

この他の野球、卓球、バスケットボールなど経験したスポーツにおいて、どれだけ多くのその道の先輩や指導者に教えを受けたことか…。

一方、競争相手(ライバル)、私が足を踏み込んだ競技、スポーツごとのライバルは所内、所外を含め、その数ははかり知れない。

出場人員に枠の決められた個人競技、人数の決っている団体競技の一員に入るためには常に上位の位置にいなければならない。出るためには勝たなければならない、あるいはミスを犯さず好プレーをしなければならない。スポーツとはまさにサバイバルゲームである。勝ち残るためには他人と同じことをしてはだめである。常に闘志と研究、練習を積む以外にはない。

そして良いライバルがなければ、レベルアップも、勝つことも、桧舞台へ出場の喜びを味わうことができないであろう。

私は本当に良い指導者、素晴らしいライバルを持つことができたことを幸せに思い、感謝をしている。(おわり)



平成9年5月
群馬県マスターズ陸上競技大会